

研究会
たより

第16回

パワーポイント学者

萩谷昌己(東京大学/調査研究運営委員会委員長)

どのくらい一般的なのか分からないが、パワーポイント・エンジニアという言葉があるようである。ものを作らずに、パワーポイントの格好いいスライドを作って、あっちこっちで洒落た講演をしているエンジニアのことである。

パワーポイント・エンジニアがいるならば、当然、パワーポイント学者もいる。こちらの方が、断然、数が多いような気がする。本来、学問の最終目標は、矛盾を見事に説明する新しい理論や、通説を覆すような新しい発見のはずである。それを文章として書いたものが論文である。そして、それを解説する講演のためにパワーポイントのスライドが出てくるべきなのであるが、何だか、順序が逆転してしまっているような気がする。パワーポイントの格好いいスライドを使って洒落た講演をすることが、学問の最終目標になってしまっている学者... パワーポイントを使って洒落た講演をするために、講演受けがよいような研究テーマを決めているような学者...

さらにやっかいなことに、研究の評価や審査なども、しばしばパワーポイントのスライドのレベルで行われていることである。ナントカ補助金の審査も、分厚い申請書類を読むよりは、パワーポイントによるヒアリングや、パワーポイントのスライドの資料などに頼るところが大きいに違いない。資料を用意する方も、絵や写真やアニメーションを多くして、やたらと分かりやすい発表を目指す。審査員の知的レベルを随分と馬鹿にしているように思えてならない。

パワーポイントの席卷についてはいうまでもないが、最近では、研究発表の講演だけでなく、言葉は悪いが、大学などの授業にまでパワーポイントがのさばっている。よい授業とは、1回の講義で100枚くらいの(アニメーションやビデオも入った)スライドを使って、しかも、授業の最初にパワーポイントのスライドを資料としてちゃんと配るといふものである。本当に大変である。パワーポイントを使うと、スライドを作る苦勞に比例して、本当に、授業がどんどん進んでしまっ、時間が余ってしまう。

こういう文章を書いていると、読者はきっと、パワーポイントの批判が始まるだろうと思うに違いない(すでに始まっているが)。もしくは、パワーポイント以前の昔話でもするだろうと思うだろう。

まあ、そんなところであるが、もう少し建設的に考えてみたい。昔ながらの黒板を使った講義では、パワーポイントのスライドと比べて、広い黒板に書くことのできる情報量は圧倒的に多かった。一般に、パワー

ポイントのスライド1枚の情報量はきわめて少なく、そのようなスライドが、どんどんと切り替わっていくのがパワーポイントを使った典型的な発表である。聞く側は、パワーポイントのスライドの流れに従ったストーリーをひたすら追いかけるだけである。黒板を使った場合でも、ひたすらノートに順番に書き写すという昔の講義ならば似たようなもの(というよりもっと悪い)かもしれないが、聞く側が講演を聞きつつも、広い黒板に書かれた情報を自由に吟味できる、という利点はある。

パワーポイントにせよ、Webのブラウジングにせよ、コンピュータを使った情報伝達は、人間の知のバンド幅を非常に狭くしているように思える。つまり、ブロードバンドと言っているのだけれども、人間の知的活動の方はナローバンドになっているように思えるのである。情報提示の画面がどんどん切り替わるのに比例して、頭の中に一度に保持できるキャッシュの情報量はどんどん小さくなっているような気がする。

何か新しいことを考え出すためには、キャッシュにある情報を自在に組み合わせることが必要だとすると、キャッシュの情報量を多くして、新しいことを思いつきやすくするような伝達手段も重要だろう。また、具体的には思い浮かばないが、キャッシュの量が多くなるように訓練する伝達手段もあってしかるべきかもしれない。

OHPが使われていた頃には、よく、2台のOHPを使ったものである。液晶プロジェクタの値段を考えると、2台と言わずに、たとえば部屋一杯の画面を使うことも可能だろう。やがて部屋一杯の画面の情報に頭に入れていけるようになればしめたものである。

限られた時間の中で多くの内容を飽きさせずに伝えるために、パワーポイントを駆使した発表はあってしかるべきである。また、一般に、すばらしい研究にはすばらしい発表が自然とついてくるものである。ただ、本当に中身のある研究ならば、いろいろな発表の形態に耐え得るはずである。黒板を使ってもいいわけだし、さらに部屋一杯の画面を使った情報量の多い発表が適しているかもしれない。それに比べて、中身のない発表は、パワーポイントのテクニックでごまかすしかないだろう。

PS. 外国出張の帰りに、フランクフルトの空港でうろついていたところ、平田FR領域委員長にお会いした。奇遇である。研究報告のことが話題になった。それについては、また書かねばならないだろう。(はぎゃ)

(平成14年9月17日受付)

